救世軍公報

GOOD NEWS
ときのこえ

War Cry
4月号
福音版
2022
April
No.2833

二〇二二年　四月一日　発行

明治二十八年創刊　福音版・毎月一日発行　広報版・奇数月十五日発行（除く七月）

イースター、おめでとう！

平本　祐子

春、新年度を迎え新たな始まりの時です。この冬は寒さ厳しく、各地で大雪が降りました。新型コロナウイルス感染症の影響も長引き、だれもが不安定な日々を忍耐して歩んでこられたのではないでしょうか。季節はめぐります。長い冬を経て、暖かな陽の光の中で、枯れたようだった木々に一斉に花が開いていくのを見ると、春の喜びと命の力強さを感じます。

この季節、キリスト教会は毎年、イースター（復活祭）を祝います。イースターは、イエス・キリストが復活したことを祝う、特別な喜びの時です。イエス様の復活を告げる天使の言葉が聖書に記されています。

「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。」（マタイによる福音書28章5、6節）

驚くべき知らせです！　歴史上かつてなかった、死からの復活。

「十字架につけられたイエス」と天使は言っています。復活の前には、十字架上の死がありました。

わたしが遣わされている小隊（教会にあたる）の外壁に、十字架が掲げられています。通りかかった方が「見て、十字架がある。ここ、キリスト教？」と話しておられるのが聞こえることがあります。十字架はキリスト教の一番のシンボルでしょう。

神の独り子イエス・キリストはこの世界に生まれ、生きて、人々と出会い、語り、神が愛そのものであることを教えてくださいました。そして、その地上の生涯の最後には、わたしたちの罪を償うために、十字架に架かり死なれたのです。十字架の上でキリストが受けられた傷、痛み、死は、人間が神に背を向け、迷い傷つきながら生きることから救われ、神の愛と平和の中に生きる道を開くために払われた大きな犠牲でした。

イエス様のお体は墓に納められましたが、墓の暗闇も死の力も、イエス様を滅ぼすことはできませんでした。イエス様は十字架の死から三日目、死を打ち破り、復活なさったのです！

復活は、人間の思いを超えた出来事です。死は人間の限界であり、恐れを感じさせるものです。人間は誰ひとり、死の力に対抗することはできません。しかし、イエス・キリストは死に打ち勝って復活され、何にも揺るがされない希望を示してくださいました。そして、キリストを信じるすべての人に、神の愛の中に希望をもって生きる新しい命を与えてくださるのです。

痛ましい刑罰の道具だった十字架は、イエス様の死と復活によって、神の愛と赦し、命と勝利を表すしるしとなりました。十字架は今も輝いて、救い主イエス・キリストを伝えています。

復活されたイエス様が、「おはよう」と弟子の女性たちに声をおかけになったことが聖書に記されています。何気ないあいさつの言葉です。また、イエス様は

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイによる福音書28章20節）

と約束してくださいました。イエス様は今も生きて、わたしたちの日常に共にいてくださいます。わたしたちが恐れや不安を覚える時も寄り添い、きょう一日を、次の一歩を、進めるように力を与えてくださいます。

春の陽だまりでほっとする時、復活のイエス様が、尽きることのない温かな命をもってお一人おひとりと共におられると知ることができますように。

イエス様は復活し、生きておられます。共に祝いましょう。

イースター、おめでとう！

（救世軍士官〔伝道者〕）

信仰の体験談　証言のページ

絵本作家
かめおか あきこさん

撮影：石黒ミカコ

温かで優しいタッチのイラストで、絵本や漫画の作品を数多く発表しておられる、かめおかあきこさん。その作品には、動物や子どものかわいらしい姿を通し、ほっと心に響く、優しい愛のメッセージが込められています。制作を支える信仰について、証言を寄せてくださいました。

救い―姉と従姉妹たちの祈りと勧めによって

「見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」（ヨハネの黙示録三章二〇節、新改訳聖書）

私が神様を受け入れたのは二〇〇四年、三十三歳の時でした。クリスチャンであった従姉妹たちから喜びと共に寄せられたのは、

「十五年間、あこちゃんが救われるようにずっと祈っていたよ！」

という言葉でした。十五年間。なんて長い年数でしょう。諦めずに祈り続けてくれた従姉妹たちの祈りと共に、イエス様もまた私の信仰の扉をずっと叩き続けておられたのです。

実際に救いのきっかけとなったのは先に救われた双子の姉でした。当時養護学校で教員をしていた姉は、同じ学校のクリスチャンの先生との出会いを通して救いに導かれました。双子ということもあり、姉は遠慮なく私に、「教会に行け」と言ってきました。その時あまり抵抗もなく教会に行けたのは、仲の良い姉からの勧めだったこともありましたが、やはり従姉妹たちの存在が大きかったように思います。

我が家の近くに住んでいた従姉妹たちとは物心ついた頃から頻繁に交流がありました。従姉妹の家は長女と次女だけがクリスチャンで、クリスチャンホームではありませんが、遊びに行って夕食をご馳走になる時はお祈りをしてから食事をしました。また、クリスマスには教会のクリスマス会に連れて行ってもらったり、すでに信仰の種は蒔かれていました。大好きな従姉妹たちが信じる神様ということもあって、キリスト教というものには当時からあまり抵抗がありませんでした。反対に、私は仏教に不信感を抱いていたのです。それは私が小学校五年生の春に亡くなった祖母の死がきっかけでした。

祖母の死を通して―天国への道、光はどこに？

私の育った家は厳格な仏教徒でした。朝は仏壇に水とご飯をそなえ、線香をあげて手を合わせるのが日課。神棚もあり、同様にしていました。祖母が亡くなるまではそのことに何の疑いもありませんでした。

祖母は病気のため歩くことができず寝たきりでした。日中はベッドの縁に座って絵を描いたり俳句をつくったりテレビを見たりして過ごしていました。そんな祖母が亡くなった日の恐怖はいまだに忘れることはできません。「死」というものを初めて身近に経験し、「人は死んだらどうなってしまうのか。おばあちゃんはどこへ行ったのか」ということを初めて考えたあの日。まるでテレビが消えて画面が真っ暗になってしまうように、意識も感情も感覚も生きていたことも何もかもがプツっとなくなる。全く何も存在しなくなる。暗闇すら感じなくなる。小学生の私の頭ではあまりにも理解できない恐ろしいことでした。棺桶の中で横たわる、もう動くことのない祖母。ふと見ると、その傍らに草履や刀が入っています。何のために？　と思っていたら、

「おばあちゃんが天国（極楽浄土）に行くために履く草履を入れたんだよ。何かあった時のために刀も入れるんだよ」

と、子どもにもわかりやすく大人が説明してくれました。（※正しい仏教の教えとは違っているかもしれませんが、当時聞いたことをそのまま書いています。）

〈そうか！　おばあちゃんは天国に行くんだ！〉

そうわかって少しだけ恐怖が和らいだのも束の間。

〈でも……歩けないおばあちゃんが歩いて天国まで行くの？　何かあったらって、病気のおばあちゃん一人で刀を使って戦わなくてはいけない危険な道なの？〉

そしてこうも聞きました。

「お線香の煙が道となって天国に行くんだよ。ろうそくの火が道を照らすんだよ」

と。

なんて細い道。なんて頼りない明かり。おばあちゃんがかわいそうだ。そう思った私と双子の姉が「もっと道が太くなるように！」と線香をたくさんたくさん供えていると、

「こら！　そんなことをしたら道が分かれてしまうべ！」

と叱られてしまったのです。私たちのせいで道が分かれておばあちゃんが迷い、天国に行けなくなってしまったらどうしよう！　その夜は悪夢にうなされ、ほとんど眠ることができませんでした。それからも仏壇や神棚に供物をしたり手を合わせる習慣は続きましたが、その時抱いた不信感は大人になっても消えることはありませんでした。

おかげで（と今では思っているのですが）教会へ行くことに大きな抵抗はなく、イエス様による救いを信じることができました。そして教会に行き始めて半年後にはバプテスマ（洗礼）を受けていました。

「愛されていることを知る」
聖書　マタイによる福音書18章12～13節より

<かめおか あきこさん　プロフィール>

山形県米沢市に生まれる。小さい頃から絵を描くのが好きで、よく漫画を描いていた。高校生の時、パステルの本を見たのをきっかけに、独学でパステルを使い出す。仙台にある東北生活文化大学を卒業後、東京に上京。デザイン会社に入社。

2000年10月、初めての絵本『ねんにいちどのおきゃくさま』を（株）文渓堂より出版し絵本作家としてデビュー。以来、多くの童話、絵本を出版。童話の挿絵、漫画、ポスター、アドベントカレンダーなど幅広い作品を手がける。絵本は中国、台湾でも翻訳出版されている。

2014年からは、雑誌『百万人の福音』（いのちのことば社）に漫画『喫茶ホーリー』を連載。2019年に連載をまとめた単行本『喫茶ホーリー』出版。

ホームページ　http://www.kameehon.com

Instagram: akikokameoka

Twitter: @kametomyumyu

Facebook: akiko.kameoka.9

絵本作家として―神様が伝えたいと願っておられることを

クリスチャンになった私は、「絵を描く」ことは神様からの賜物（たまもの）だということを知りました。二〇〇〇年に絵本を出版し作家デビューしましたが、この時まだ私はクリスチャンではありませんでした。賜物は賜物でも、「絵本作家になれたのは、自分の力と努力の賜物」という考えでした。ですからクリスチャンになった時、姉から、

「神様から頂（いただ）いたこの賜物を神様のために用いることができますように、と祈ってみるといいよ」

と言われると、〈そうか。絵を描くというのは神様の賜物なのか。神様から頂いた力なんだ〉という感謝の気持ちがあふれると同時に、そのことに強い抵抗を感じる自分がいたのです。〈神様がくださった賜物ということはわかった。でも絵本を出版できたのは今まで私が努力してきたからじゃないのか。神様の力であって私の力じゃなかったのか〉と。まるで今までやってきたすべてを否定されている気持ちになったのです。でも「神様がくださる賜物」はそういうものではないことがわかってくると、制作に行き詰まった時には必ずこう祈るようになりました。

「神様、どうか私が描きたいものではなく、あなたが私に描いてほしいこと、あなたが人々に伝えたいと願っておられることを教えてください」

と。すると、神様が知恵とアイデアをくださり、止まっていた手が動くようになります。まさに神様の御力（みちから）だと信じざるを得ません。ただし、それを一番良い形で表現することは私に託されており、そのためには技術を磨く努力をしたり考えたり挑戦したりする必要があります。つまり、神様は賜物をくださったけれど、それを生かすのは頂いた側の人間であり、そういう点では私も力を出さなくてはいけないわけで、そうやって成長させてくださるのだとわかったのです。それこそ大きな愛です。それ以来、以前抱いた抵抗感は消え去りました。

しかし、神様を伝えるための絵本が描きたいと祈れど祈れど、その機会は巡ってきません。祈り続けて八年が経（た）った頃です。当時集っていた母教会に、「いのちのことば社」の福音車「ゴスペルボックス」（キリスト教書の移動式書店）がやってきました。その日に限って、いつもは持ち歩くことはない自分の絵本が手元にありました。私は販売担当の方にその絵本を渡し、

「神様を伝える絵本が描きたいのです」

と売り込みました。その絵本が編集者の手に渡り、とうとうクリスマスのトラクトを描くという、伝道の仕事をいただくことができたのです。ここにも神様の賜物に対するご計画を感じます。この八年という月日を経（へ）て、ようやく神様を伝えることのできるだけの知識や経験や信仰（もちろん今もまだちっぽけな者ではありますが）が与えられ、神様のゴーサインが出たのだと。神様は一人ひとりをしっかりご覧になり成長させ、時が来たら祈りに答えてくださるのだと。

絵本は、クリスチャンじゃない人にも手に取っていただく機会が多く、神様を知る入口として有効だと身をもって体験してきました。神様のご計画に身を委（ゆだ）ねつつ、聖書のエッセンスを取り入れた作品をこれからもつくっていきたいと願っています。

（恵泉キリスト教会・米沢チャペル教会員）

創立者　ウイリアム・ブース　大将　ブライアン・ペドル（万国本営　英国ロンドン）　日本司令官　スティーブン・モーリス（救世軍本営　東京都千代田区）

WINDOWS on the ARMY WORLD　世界をみつめて

〈マラウイ〉

●人身取引の被害にあった児童の救援

アフリカ南東部、マラウイのムチンジという都市で救世軍が運営している反児童人身取引センターでは、救出された子どもたちに宿泊・カウンセリング・医療を提供し、社会への復帰を支援する活動が続けられています。

●新しい農法の指導

地球温暖化による気候の変動で農作物の収穫量が減少し、飢饉（ききん）に見舞われるリスクが世界で増大していますが、マラウイの救世軍では、新しい農法を教えるプログラムを提供しています。これに参加した農民は、従来よりもトウモロコシの収穫量を上げ、生活を安定させることに成功しました。

〈リベリア〉

●太陽電池パネルの設置

内戦で多くのインフラが破壊されたリベリアでは、現在も電力の安定供給が困難な状況にあり、電気代も非常に高額です。リベリアの救世軍は教育の分野での働きが盛んで、運営する11カ所の小学校や中学校では、太陽電池パネルを導入することによって、電力を安定的に得ると共に、電気代の大幅な節約に成功しました。

〈オランダ〉

●「走る伝道所」の活躍

救世軍は2台の移動式伝道車を導入して、オランダ南部地方を巡回し、福音を伝えています。全長10メートルのキャンピングカーを改造した「走る伝道所」は、走行速度は時速32kmしかありませんが、談話室、カフェ、リサイクルショップを備え、無料のWi-Fiもあります。

救世軍とは？ What is The Salvation Army?

心は神に　手は人に　Heart to God, Hand to Man

救世軍は、世界132の国と地域で活動するプロテスタントのキリスト教会で、国際本部は英国ロンドンにあります。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウイリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で困難な生活状況にある人々に助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。日本での働きは1895（明治28）年にイギリスから士官（伝道者）の一行が来日して始まりました。

全世界で、救世軍はアルコールを飲まない生き方を積極的に推進しており、救世軍の兵士（信徒）はアルコールなしの生き方を選びます。これは創立以来の立場であり、アルコールの乱用が身体と精神に引き起こす多くの疾患、また個人のみならず家族や地域社会に及ぼす害を憂慮することから生まれたものです。コロナ禍の中でアルコールへの依存症も増加しているようです。アルコールなしの生き方もあることを、救世軍は示し続けています。

オンライン

イースターコンサート

4月17日（日）午後6時

演奏：救世軍ジャパン・スタッフ・バンド、ジャパン・スタッフ・ソングスターズ

イースターの喜びをご一緒に！

救世軍公式YouTubeにて配信

酒害強調週間

3月27日（日）～4月2日（土）

多くの人はアルコールを安全に適量を摂取していると考えられますが、アルコールが害を及ぼし、依存症になる可能性を常に伴っていることを覚えてください！

救世軍公報　ときのこえ
発行日　福音版／毎月1日、広報版／奇数月15日（除く7月）
定　価　福音版／1部40円、広報版／1部100円
（税込）　クリスマス特集号（12月1日号）／1部100円
振　替　00180－5－4400
発行兼　救　世　軍
印刷人　代表者　スティーブン・モーリス
編集人　山谷　真
発行所　救世軍本営　https://www.salvationarmy.or.jp
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話　03-3237-0881（代表）
Mail　jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所　ピーアンドエス
@SArmyJP　SArmy_JP　救世軍 The Salvation Army

聖書は新共同訳を使用しています　©共同訳聖書実行委員会 © 日本聖書協会　救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営（左記）、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
・私の近くの救世軍を紹介してください。　・キリスト教についてもっと知りたいです。
・『ときのこえ』の購読を申し込みます。　・相談を希望します。